

地域おこし

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45177

11. 地域おこし

丸 田 唯

1. はじめに
2. ござれ祭りが町の一大イベントになるまで
3. のとキリシマツツジをめぐる新たな試み
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

戦後から現在にいたるまで、地方から都市への人口流出が止まらない。日本全国の地方自治体が過疎地域の問題を抱え、その問題解決のため日々奮闘している。旧柳田村も人口減少、高齢化などの問題を抱える地域の一つであり、それゆえ平成の市町村合併の波に乗って2005年3月1日に能都町、内浦町と合併して能登町になった。しかし、根本的な問題が解決したということはない。

今やどこの市町村も「まちおこし」に力を入れている。旧柳田村でもそれは例外ではなく、大勢の方々が旧柳田村に伝わる伝統行事、特産物に力を注いでいた。そして、まちおこしと一口に言ってもそのあり方は地域によって様々である。民間の人が積極的に地域に働きかけるところもあれば、行政が主体となって地域に働きかけるところもある。他にもいろいろな方法があると思うが、旧柳田村では民間と行政が協力して行う手法がとられていた。今回取り上げる「ござれ祭り」と「のとキリシマツツジ」もそれに則っている。

以下に続く第2節ではござれ祭りが合併前と合併後ではどのように変化し、現在地域にどう関与し続けているのかを考える。第3節では論題をのとキリシマツツジに変え、その歴史、そして今、なぜ地域活性化のために注目されるようになったのかを述べていく。第4節では、第2節と第3節の内容を踏まえて総合的に考察する。

2. ござれ祭りが町の一大イベントになるまで

2.1 ござれ祭りの概要

ござれ祭りは1992年に誕生した。ゆえに、旧柳田村にとって比較的新しい祭りであるといえる。毎年8月の後半に能登町柳田植物公園で行われ、近年では1万人弱ほどの集客がある（表1、図1参照）。客のほとんどは地元の人だが、県内外からも来ているという。2015年はニコニコ動画¹の

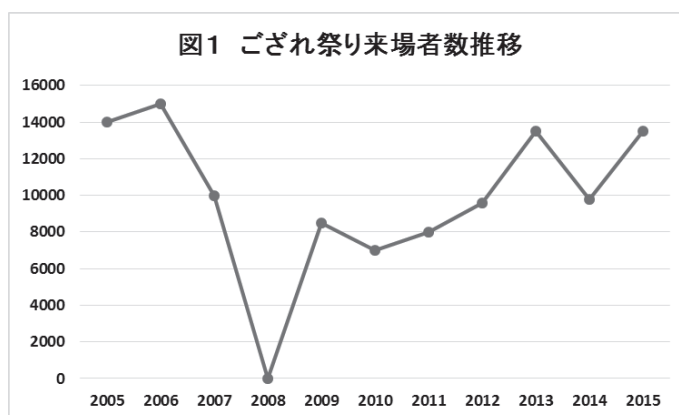
企画「ニコニコ町会議」の開催地にもなったため、来場者数は昨年度よりも増え、県外から訪れる人も多かったようだ。

ござれ祭りは、合併後に一度だけ開催されなかった年がある。しかし、旧柳田村の人たちが中心となって復活の声が集まったため、その一年後の2009年にござれ祭りは復活した。だが、2009～2012年までは「キリコと灯りの祭典」という名前で祭りが行われている。「ござれ祭り」という名前が復活したのは2013年からである。

祭りのプログラムの基本線は変えず、運営は実行委員会が行っている。行政が積極的に動くというわけではなく、サポートするだけにとどまる。

表1 ござれ祭り来場者数

開催年(年)	来場者数(人)
2005	14,000
2006	15,000
2007	10,000
2008	中止
2009	8,500
2010	7,000
2011	8,000
2012	9,600
2013	13,500
2014	9,800
2015	13,500



(出所：能登町公式HPをもとに作成)

(出所：能登町公式HPをもとに作成)

2.2 合併と運営の転換

ござれ祭りが開催するきっかけは旧柳田村の村おこしだった。村おこしをする際、まず目を付けたのが村内の各集落が保存するキリコであった。なぜ、キリコなのかというと、各集落で行われる祭りでキリコは欠かせないものであったからだ。旧柳田村の伝統的な祭り、柳田大祭にももちろん使われている。しかし、人手不足などの問題から祭りに出される数も徐々に減少していくことになり、伝統文化の継承が危ぶまれるようになった。そのような貴重な文化遺産を廃れさせないためにも、キリコをメインにした旧柳田村独自の祭りが考案されることになった。初代実行

委員会の実行委員長であったA氏（野田、80歳代、男性）を筆頭に十年の歳月をかけてようやく平成4（1992）年に開催が実現した。

次に、行政はござれ祭りの誕生とどのように関わったのだろうか。調査していくなかで、旧柳田村の観光課長として第1回ござれ祭りに携わったB氏にお話を聞くことができた。

B氏（笹川、60歳代、男性）

1991年に国体が石川県で行われたとき、柳田植物公園がアーチェリー場として使われた。国体が終わった後、その公園を何かに使えないかと考えられたときに旧柳田村を盛り上げようということでござれ祭りの企画が進められた。キリコを広場に集めようというアイデアが採用され、第一回目は2、30本くらいのキリコが集まった（正確には24本）。予算はおおよそ1000万円でそのうち400万円はキリコ関係に使った。このときはお礼という形で謝礼金を渡し、そのお金でキリコを修理できるところが多かった。その他にも歌手を呼ぶなど手を尽くした。

当初、2000人想定で祭りの企画を進めていたが、当日には予想をはるかに上回る約1万人ものお客さんが来場した。そのため、駐車場がなくなる非常事態もおこり、怒られてしまった。祭りでは8時に花火が上がる予定だったので、地元の人たちのなかには7時半くらいに家を出た人もいたが、人が多すぎたこともあり花火を見ることができなかつたらしい。

第1回のござれ祭りのとき進んで出店してくれる人は少なく、水道・電気・ガスなどを用意し、店の人に頼んで出してもらっていた。しかし、当日は予想外のお客さんが集まったのですぐに売れきれてしまった。次年度は第1回目ときとは一転して出店の申し込みが殺到していた。

次の年のござれ祭りからは多くの来場客に対応できるように改善されていき、今ではシャトルバスも運行するようになっている。

このようにござれ祭りは華々しいデビューを遂げた。以前、旧柳田村の観光課長だったB氏の話からも分かるように行政が運営に回っていたという印象を受けるが、そんな祭りの運営体制に転機が訪れることになる。それが2005年の合併であった。合併前の実行委員会＝旧柳田村役場という構図が障害となり、合併後に能登町になると祭りが行われない年があった。しかし、旧柳田村が中心になってござれ祭り復活の要望の声が集まり、地域おこしとして2010年に再び開催されることになった。そして現在、祭りの実質的な運営は実行委員会に移っている。

C氏（能登町役場ふるさと振興課、男性）からのお話によると、実行委員会は旧柳田村出身とは限らず能登町の人で構成され、商工会や区長会の人に関わっているという。実行委員会はキリコ・イベント・テナントなどの様々な部会に分かれており、何回か会議を重ねる。ここから、昔より行政の人が運営に関わることはなくなったといえそうだが、実行委員会の中には役場の人も

いるという。そのため、その関係が皆無になったというわけではないが、合併前の運営体制とは明らかに変わったといえるであろう。つまり、このころから前述でも述べたように行政はサポートをする側に回ったのである。

2.3 地域と結びつく祭り

ござれ祭りは地域おこしのための祭りとして出発したこともあり、ここで得られる利益のほとんどは地元におちるようになっている。例えば、出店する店のほとんどは実際に地元で商売している店が占めている。能登町の特産（能登牛、ブルーベリーなど）が使われた店が多いのも特徴だ。今年のテナントには26団体が参加している。

実際に、筆者が2015年8月22日に開催されたござれ祭りに訪れてみると、ほかの祭りではよく目にする露店の店は圧倒的に少なく、地元の人による店が大部分を占めていた。祭り会場の隅から隅まで一直線に店が並び、一通り見て回るのに時間がかかった。地元の人のお店が多いこともあり、露店の店は端に追いやられているようにも見えた。また、今回（2015年）の実習で泊まらせていただいた宿の方々や能登で有名なジェラートの店も出店されていた。焼き鳥、焼きそばなどの軽い軽食からアイスクリームやジュースといったデザートまで様々なものが売られていたが、全体的にブルーベリー関連の店が多かった印象がある。

現在のござれ祭りは11時半から20時半までノンストップで行われている。プログラムの構成として、だいたい17時ごろまで地元の人による太鼓や舞踊、ダンスなど様々な演芸が披露される。出演したい人が柳田地区以外からも大勢集まり、今回（2015年）は能登町の壁も超えて穴水町からも出演していたようだ。17時から19時ごろまでは実行委員会が呼んだ芸能人による歌謡ショーが行われる。比較的、年齢層の高い方に人気のある演歌歌手が訪れている。その後、19時を過ぎて周りが暗くなるとキリコに灯りが点灯され、最後に花火が上がって祭りが締めくくられる。

メインのプログラムは今も変わらずキリコであるという。キリコの数はいくつも減ってしまったが、それでも今年（2015年）は18基出された（写真1参照）。キリコには各集落の名前が刻まれており、周辺にはその集落に住む人たちが集まって談笑を楽しんでいた。暗くなってキリコに灯りが灯されると、その集落の人たちによってキリコが動かされる。動いているキリコの周りには多くの声が飛び交い、迫力があつた（写真2参照）。縄でキリコを支える人と、キリコを担いで運ぶ人と二手に分かれていた。年長の方が縄でキリコを支え、若い人がキリコを運んでいるようだった。このとき、キリコを動かしていたのは町民だけではなく、ボランティアとして学生もいた。キリコは縦に大きいので上の方が常にぐらついていて不安定に見えた。そのたびに四方で縄を持っている人が引っ張り合い、上手にキリコを動かしていた。キリコを動かす距離は数十メートルと長いわけではなく、また、動かす時間も30分程度で終わっていたが、その様子を見ていてキリコを動かすのは相当な労力のいる仕事であると感じた。

C氏によると、今回（2015年）の祭りで実際に動いたキリコは18基のうちの4、5基だけで、ほかのキリコは展示されているだけだった。その理由は簡単で、動かす人が足りないということだった。また、動かす以前に柳田植物公園に持ってくるだけでも経費はかかるので、多くの集落は持ってきて立てるだけでも精一杯であるという。キリコを広場に集めようというアイデアから始まったござれ祭りは、広場に集まるキリコが減りつつあるという問題を抱える。能登を象徴するキリコをどうやって守っていくかが、ござれ祭りだけではなく、様々な祭りの存続につながるのではないだろうか。

歴史的に見るとござれ祭りは新しい祭りではある。しかし、その歴史の浅さを地元と強く結びつくことによってカバーしているともいえる。その証拠に、合併後に一回廃れたものの地元住民のおかげで復活を遂げ現在まで続いている。ござれ祭りは旧柳田村発祥の祭りであるが、今では能登町の人々にも受け入れられつつあり、広く人気を集めている。



写真 1 柳田植物公園に並べられたキリコ 写真 2 動いているキリコ（いずれも 2015 年筆者撮影）

以上まではござれ祭りについて述べてきた。以下からは節を改め、のときリシマツツジについて記していく。

3. のときリシマツツジをめぐる新たな試み

3.1 のときリシマツツジの概要

この項では、『のときリシマツツジ 写真紀行』（2007：134）、「のときリシマツツジガイドブッ

ク」(2015:16-23)の参考文献・資料、およびD氏(石井、60歳代、男性)、E氏(当目、能登町農林水産課、男性)、F氏(石井、70歳代、男性)、G氏(笹川、80歳代、男性)のお話をもとにまとめてある。

のとキシマツツジは奥能登を中心に4月下旬から5月中旬に咲く花である。葉が見えなくなるほど密集して花が咲き誇る。しかし、見ごろは短く7~10日ほどしかない。能登地方には樹齢100年を超える古木が500株以上確認されており、日本一の古木の群生地である。のとキシマツツジの品種は命名されているもので7種類、そして、品種に分けることのできない「けら性」が3系統ある。花の色も複数あるが大まかに分けると、朱赤・朱・紅・紫の四種類である。そして、この「のとキシマツツジ」という名前は、11年前(2004年)に統一された名前である。それ以前は、4、5種類ほどの呼び方があったが、他の地域が混乱ないように団体が集まって考えた。

現在、「のとキシマツツジオープンガーデン」という名前で盆栽愛好家の方々が自分で育てたのとキシマツツジを一般公開するイベントが開かれている。無料で気軽にのとキシマツツジを見ることができるため、観光客が増えている。また、のとキシマツツジをモチーフにした商品開発も進み、経済的な分野にも波及している。

そして、「のとキシマツツジ連絡協議会」という奥能登4か所²にまたがる会や、「のとキシマツツジの郷」という能登町のNPO法人もあり、民間が主体となって活動を行っている。しかし、民間だけでは金銭面などでその活動に制限がかかることがある。そのため、行政と連携し、のとキシマツツジのさらなる発展が期待されているのだ。

3.2 内に秘められた学術的価値

この項では、『のとキシマツツジ 写真紀行』(2007:96-99)、「のとキシマツツジガイドブック」(2015:4-7)の参考文献・資料、およびD氏、E氏、F氏、G氏のお話をもとにまとめてある。

最初、能登の方たちはのとキシマツツジがいつ、どこから、どのようにして能登に入ってきたのか知らなかった。昔から個人の庭に咲いていたため、盆栽好きな愛好家が楽しんで育てており、特別視することはなかった。しかし、転機が訪れる。昭和42(1967)年に「柳田盆友会」(初めは「花の会」という名前で)が発足し、のとキシマツツジの保護、育成などの活動を行った。このころから、金沢のデパートでのとキシマツツジの展覧会を行い、徐々に美しい花だと認識されるようになったが、美しいだけで終わってしまう可能性があった。だが、2005年に会長だったG氏の働きかけもあって、H氏(新潟県立植物園副園長、男性)とI氏(島根大学教授、男性)がのとキシマツツジの調査に訪れた。調査を進めていく中で能登には樹齢100年以上とされるキシマツツジの古木が500本以上あり、日本一の古木の群生地であることが分かった。また、全国のキシマツツジとDNA検査をしたところ、のとキシマツツジにしかないDNAが見つかる

り、能登で独自に発達した品種と認定された。これによって、のとキシマツツジは地域資源として価値があることが学術的にも証明されたため 2010 年に「紅重（べにがさね）」という名前で商標登録が行われている。

調査によってのとキシマツツジは能登固有のものと分かったが、これらは初めから能登にあったというわけではなかった。その元をたどると「江戸キシマ品種群」の一つであることが明らかになった。H 氏と I 氏の見解によると、17 世紀の中頃、南九州にあったものが江戸に持ち込まれ、そこで品種改良がされたあとに北前船などで能登にもたらされた可能性があるとのことだ。実は、キシマツツジは種では増えず、挿し木でしか増えない。つまり、増やすには人の手が必要入るのだが、北前船の名簿などを見てもキシマツツジについての記述はなかった。そのため、現在は商品ではなく趣味を通じて能登にキシマツツジが入ってきたのではないかと考えられている。

このようにのとキシマツツジは江戸時代ごろから個人の庭も含めて能登に根付いていたわけだが、人に見せることはなく、家の裏に隠すように植えてあったという。その理由は、柿やイチジクなど違って実をつけない木なので、鑑賞用として扱われており贅沢品だったからだ。このころから、のとキシマツツジはきらびやかな木として人々を魅了していたに違いない。今ではのとキシマツツジオープンガーデンが開かれるなど、積極的にその存在が広められている。3、4 年前くらいから地元の新聞記事にも取り上げられるようになり、県内における認知度は上がってきている。そして、現在、3 本ののとキシマツツジが県指定の天然記念物に指定されており、そのうちの一本は、能登町の五十里にあるのだという。

さて、のとキシマツツジに貢献してきた柳田盆友会だが、平成 21（2009）年に「のとキシマツツジの郷」という NPO 法人へと変わりその活動をさらに拡大させている。

3.3 過疎高齢化による管理の難しさ

この項では、E 氏と F 氏、G 氏のお話をもとにまとめている。

のとキシマツツジはほかの盆栽と比べて手入れや管理が非常に難しいものであった。種では増えず、挿し木や株でしか増えない。冬には雪吊りをしなければならず、手間暇がかかる。加えて高齢になると世話をすることが難しくなる。こういった事情から育てることが困難になったのとキシマツツジが増えてきた。NPO 法人のとキシマツツジの郷ではそのようなのとキシマツツジを引き取り、柳田植物公園に植えて育てている。引き取る際の金銭的なことは話し合いで決めている。寄付という形で引き取ったり、有償で引き取ったりと様々である。一方、行政側はいくつものキシマツツジを買い取り続けていくことは難しいと考えているという。

また、NPO ではのとキシマツツジの出張治療も行っている。輪島市にある樹齢 450 年ののとキシマツツジを 3 年間ほど管理しているそうだ。この木は樹齢が長いこともあってかなり弱っ

ていた。そのため、この木の所有者が輪島市に寄付をし、その後、輪島市がNPOに管理を委託したのであった。管理方法は分担制で、一年間にいくつかの作業班を作って、その班ごとに世話をしている。

ほかにも、のときりしまつつじの手入れができなくなった人と育てたい人をつなぐ役割も担っている。

3.4 能登から全国に向けて魅力を発信

ここまでののときりしまつつじについて述べてきたが、のときりしまつつじの本物を見たことがないという人は多いだろう。しかし、今ではどんな人でも直にのときりしまつつじを見ることのできるイベントがある。それが、平成20(2008)年から始まった「のときりしまつつじオープンガーデン」だ。このイベントは毎年4月下旬から5月中旬頃まで、盆栽愛好家たちがのときりしまつつじを育てている場所で公開されているが、そのほとんどは個人のお宅である。公開地は能登町だけではなく、輪島市、珠洲市、穴水町などの奥能登地域で開催されている。

E氏(当日、能登町農林水産課、男性)

初めののときりしまつつじオープンガーデンは34か所しかなかったが、今では60か所近くで見ることができる。今年(2015年)ののときりしまつつじフェスティバルが開催されたが、場所によって苗を買うことができた場所がある。

つまり、このオープンガーデンは年を追うごとにその勢いを増しているのだ。実習中にのときりしまつつじオープンガーデンのパンフレットを頂いた。このパンフレットにはどこにどんなオープンガーデンがあるのか詳細に記されていたので非常に分かりやすい。観光客など初めて訪れる人でも行きやすいように工夫されているといえる。

D氏(石井、60歳代、男性)

のときりしまつつじオープンガーデンは自由に誰でも見ることができる。泊まり込みで見に来る人や観光バスに乗って見に来る人たちもいる。のときりしまつつじが満開になるのは一週間しかなく、日のかげんや日当たりによっても咲く雰囲気が変わってくる。そのため、NPO法人(のときりしまつつじの郷)のインターネットサイトなどで見ごろをお知らせしたりしている。

この方は、実際にのときりしまつつじを育てられており、オープンガーデンにも参加されている。「お金をとるのはオープンガーデンではない」とF氏(石井、70歳代、男性)が話されるように、このイベントの参加者のほとんどはボランティアである。つまり、のときりしまつつじを育てている方々の温かなサービス精神によって、こののときりしまつつじオープンガーデンが成り立っているということができるのだ。

しかし、のときりしまつつじは能登だけにとどまらない。のときりしまつつじの郷の活動によ

って、平成 22（2010）年にのとキリシマツツジの展覧会が東京の新宿御苑で開催された。

E 氏（当日、能登町農林水産課、男性）

展覧会は 3 月上旬だったので、のとキリシマツツジを 2 ヶ月早めて咲かせる努力をした。だが、あまり人が来なかったので大きな成果は得られなかった。展示会は 6 日間あり 5 人くらいで交代しながらのとキリシマツツジの世話をしている。準備は 2 日前から始める必要があり、展覧会期間中の滞在費などの諸経費が 150 万円くらいかかるが、いろいろな事業費を使っているので、毎年展示会に行くことができています。

活動費をどこから調達してくるかが最大の問題点だが、ここが行政の出番だそうだ。行政の人は NPO 法人の人に比べて、補助金や事業費などを取ってくるのが上手いという。これが行政の強みであり、NPO 法人の人たちにとっても支えになっている。

この展覧会は、平成 22（2010）年から今年（2015 年）まで関東を中心に様々な場所で毎年開催している。しかし、平成 24（2012）年には京都府立植物園、平成 25（2013）年には新潟県立植物園で開かれるなど、必ずしも関東だけではない。来年は初となる大阪での開催を予定している。まだまだのとキリシマツツジの知名度は低いと思われるが、これらの活動によりいつしかのとキリシマツツジの名前が全国に知れ渡る日が来るであろう。

さて、第 3 節 2 項でのとキリシマツツジには学術的価値があると述べたが、実は、その価値をさらに高めるため、のとキリシマツツジの戸籍簿、『深紅の戸籍簿』が盆栽愛好家有志たちによって作られた。

G 氏（笹川、80 歳代、男性）

奥能登にある樹齢 100 年以上ののとキリシマツツジ、525 本を集めて一冊の本にまとめた。本には、のとキリシマツツジ一つ一つの木や花の全体を撮った写真、そして、花一輪だけを写した写真を載せている。戸籍簿という名前の理由は、のとキリシマツツジ一本一本にタグをつけて今どこにあるのかが分かるようになっており、人間の戸籍簿と同じ役割を果たしているからだ。のとキリシマツツジを国指定の花にして、将来的には世界文化遺産にもしていきたいと考えているので、その基礎資料になればとの思いがある。

この戸籍簿を作るのに 6 年もの歳月がかか



写真 3 『深紅の戸籍簿』
(2015 年、G 氏のお宅にて筆者撮影)

ったという。戸籍簿の中は写真3のようにとクリシマツツジの特徴が一本一本細く書かれている。本としてまとめられた『深紅の戸籍簿』は NPO 法人のとクリシマツツジの郷の HP (<http://notokirishima.com/>) でも見ることができる。

のとクリシマツツジの郷は様々なところにとクリシマツツジを植樹するという活動も行っている。2013年には能登空港の前に植え、2014年には兼六園の時雨亭の玄関の庭石の前に3本植えた。兼六園は文化財に指定されていることもあり、実現するまでに10年ほどの歳月を要したという。また、のとクリシマツツジの本家との一つとも言われている、宮崎県霧島市の市役所前にものとクリシマツツジが植えられている(写真4)。霧島市長がわざわざ能登に訪れてもらっていったとのことだ。なぜ、本家の霧島市が能登からのとクリシマツツジをもっていったか。実は驚くべきことに、霧島市ではクリシマツツジの存在が忘れられていたのだった。しかし、のとクリシマツツジが盛り上がりはじめた今、クリシマツツジの良さを再確認したという。能登を超えて、はるか遠い宮崎県に植えられたのとクリシマツツジは、もはや能登だけでしか見られないものではなくなっている。

平成26(2014)年5月には能登で「全国クリシマツツジサミット」が開かれ、交流しあうことや地域活性化について話し合われた。その翌年の平成27(2015)年には霧島市で開かれ、さらなる交流が始まろうとしている。

また、のとクリシマツツジを使ったアクセサリー作りがされており、新聞でも紹介された。能登町出身のJさん(アクセサリー作家、女性)がのとクリシマツツジの花びらをドライフラワーにして、それをイヤリングなどにしようというアイデアを思いつき、現在制作している最中である。一般発売はまだだという。



写真4 霧島市役所前のとクリシマツツジ
(2015年にG氏の写真を筆者撮影)

4. 考察

私は旧柳田村の地域おこしになっているものとして、ござれ祭りのとクリシマツツジを挙げ、それらに焦点を当てた。ござれ祭りのとクリシマツツジに共通することが二つある。一つ目は、ござれ祭りのとクリシマツツジに対する、旧柳田村の人々の想いが強く込められていることだ。ござれ祭りが一度開催されなかったものの、一年後に復活を遂げたその裏にはござれ祭りを愛する旧柳田村の方の復活の声があった。のとクリシマツツジは、江戸時代のころ贅品品としてなかなか表舞台に出ることはなかったが、切られることなく現在までそれぞれの庭などで咲き続けて

いた。今では学術的価値が見いだされ、さらに大切にされている。地域おこしを始めるには、まず、地域の良さを自分たちが知らなければならない。同じように、地域おこしのためにあるものを材料として使う際は、そのものの良さを地域の人々が理解していなければならない。

2つ目は、行政と連携して活動している点で共通している。どちらもお金の面で行政がそのサポートしているが、決して補助金を出しているだけではない。合併前はB氏のようにござれ祭りの運営に奔走された方もいて、合併後は祭りの実行委員会の中に入って、直接運営に関わる人もいる。のとキリシマツツジにおいては行政の方で積極的に活動に参加されている人もいる。一見、行政と民間の間は隔たれているように思うが、この旧柳田村、そして、能登の地域おこしに関してはその隔たりはない。お互いが歩み寄り、協力して地域のために奮闘しているのである。

では、これらの地域おこしは成功しているといえるだろうか。第2節で述べたござれ祭りには、近年およそ1万人近くの人が訪れている。実習の対象になった旧柳田村8地区の2015年の人口が1,021人であることを考えると、その10倍の人が祭りに来ていることになる。加えて、ござれ祭りには地元の店が多く出店している。地域の経済効果から考えれば、成功しているといえる。だが、問題は祭りの来場客とキリコ数をこれからも維持することができるかどうかだ。メインのキリコはもちろん、祭りに訪れる人がいなければ成立しない。旧柳田村の魅力はもちろん、能登の魅力も存分に味わえるござれ祭りがこれからも続いていくことを願う。

次に第3節で述べたのとキリシマツツジは、旧柳田村を超え、奥能登全域の地域おこしとなった。のとキリシマツツジを広めるための盆栽愛好家の方々の活動が大きくなり、学問対象として注目された以上、能登をPRすることができる潜在能力が非常に高いと思われる。のとキリシマツツジはこれからさらに飛躍し、美しい花を咲かせながら能登の活性化の架け橋になっていくであろう。

5. おわりに

この報告書を最後まで書き上げることができたのは、旧柳田村の皆様と聞き取り調査に関わってくださった皆様のおかげです。しかし、この報告書ですべての事柄を網羅させているというわけではありません。その点につきましてはどうかご容赦ください。

最後に、私たちの調査実習にご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

注

¹ インターネットの動画共有サイト。

² 珠洲市、輪島市、穴水町、能登町を指す。